

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20300275

研究課題名（和文） 教師の専門性を継続的に発達支援する学校学習システムに関する実証的研究

研究課題名（英文） A positive research on school learning systems to support the continuing professional development of teacher

研究代表者

野嶋 栄一郎（NOJIMA EIICHIRO）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：20000086

研究成果の概要（和文）：

学校改善の中心をなす概念の一つは教師の継続的な職能的発達（CPD：Continuing Professional Development）である。本研究は、この目標を達成することを前提に試みられた二つの実践的試行モデルについてその理念と有効性に言及するものである。その一つは、館山市立北条小学校において長年にわたり複合的に機能しているプラン検証システムであり、いまひとつは早稲田大学の学生により所沢市立明峰小学校で実践された過去2年間に渡る持続的な学校改善への取り組みである。

研究成果の概要（英文）：

A key-concept of the school improvement is the Continuing Professional Development of teacher. In the study, we referred two practical models which were designed to accomplish our educational objectives and to certificate their validity. One is a case study on sustainable complex PDCA systems which was held in Hojo elementary school in TATEYAMA city. Another one is case study of sustainable school improvement through the internship between Meiho elementary school in TOKOROZAWA city and WASEDA University.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
23年度	3,000,000	900,000	3,900,000
22年度	2,900,000	870,000	3,770,000
21年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
20年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：教師教育・校内研修・職能発達・学校システム

1. 研究開始当初の背景

（1）学校の生産性を上げる key-concept は、教師の継続的な職能発達である。その中心をなす作業は現職教育と呼ばれ、都道府県、市町村レベルでの研修、校内研修、さらに民間レベルの研修がある。これとは別に日本独自の職能発達を促す研修に授業研究（Lesson Study）がある。授業研究それ自体は長い歴史を有するものであるが、最近欧米において

その研究のあり方が注目を浴びてきた。しかし、現職教育の目指す方向が、だからといって明確になってきたわけではない。

（2）職能教育の目指す教師像は、「技術者モデル」から「反省的实践家モデル」、「研究者としての教師モデル」へと変遷してきたが、必ずしも教師像の確立が実現されてきたわけではない。「実践と理論の乖離」という現実は否定できない。「アクションリサーチ」

や「セルフスタディ」という方法論が提起され、新しい研究が生起しているが「実践と理論の乖離」という現象は、依然として存在する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師の職能教育に関する理論と実践の乖離を埋める新しい方法論を開発することにある。

3. 研究の方法

本研究は、二つの異なった方法を提案し、且つそれらの方法を実践的に検証する。

(1) 館山市立北条小学校は独自の教育計画を持ち、「プラン」、「統合学習」というカリキュラム開発を前提とし、それらを長年に渡り実践してきている。また、これらの実現のために、PDCA サイクルを軸とする学年単位の職員会議を週に1回のサイクルで実行している。この会議を「学年会」と呼ぶ。この学校は「学年会」を密度濃く運営することによって、理論と実践の乖離を克服していると推論される。「学年会」のインタビューと映像記録をベースにデータエビデンスの考えに基づく職能発達のプログラムの効果を実証する。

(2) 早稲田大学と所沢市立明峰小学校の連携による学校の授業への学生参加がもたらす学生、教員相互の職能効果を実証的に明らかにする。本研究は、2年に渡る連携の実践データをベースにしており、双方に関わるアクションリサーチ的研究を行う。

4. 研究成果

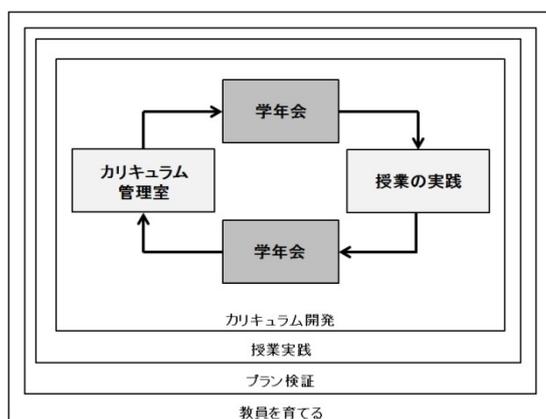


図1：プラン検証システム

(1) 館山市立北条小学校の学校学習システム

1) プラン検証システムとしての学校学習システム

図1に示すように複合的に機能するプラン検証システムとして簡潔に表現できる。このシステムは、カリキュラム開発、授業実践、

プラン検証、教員を育てる機能等の異なった目的をカリキュラム管理室において、学年会という学年を中心とした教師集団の会議体によって営まれるPDCAサイクルを循環させることにより遂行させている。本研究は、この検証システムの有効性を証明することに努力を費やした。方法としては、スケジュール的に収録可能であった1年生から4年生までの学年会を対象にその会議内容を録画、録音、分析することによって図1の各機能の実質的な討議がなされたかを検証した。結果としては、今後より十分な調査を重ねる必要があるが、今回の調査において、学年会の討議内容は図1の複合的に機能するプラン検証システムとして象徴的に表現されたものをほぼ実現していると考えられる。

特にこの検証システムを教員の教育実践能力を育てるシステムと考えた場合に、その営みが毎週1回定期的に開催される学年会によってカリキュラム開発、授業実践、プラン検証、教員の養成等の多方面に渡る複眼的視点からの同僚教師の間で営まれるディスカッションの内容に分け入ることによって、詳細に教員養成と絡み合っていることを証明できた。今後は、これらの実証をより広範囲により深く試みることによって、確かなものにしていきたい。

2) 学年会の機能

①PDCAサイクルのPLANの機能

学年会における「教科」場面では、学習計画の提案、及び吟味が毎週行われている。学習計画の提案は主に教科担当によって行われるため、学年会に参加する教師は、どの教師も日常的に学習計画の提案を行っている。これは、プラン検証システムにおけるPDCAサイクルのPLANの機能に相当するものと言える。

②PDCAサイクルのCHECKおよびACTIONの機能

教師たちは、学年会の「教科」場面において、自身のクラスにおける授業の様子を開示し、共有している。そして、そこから浮上した問題点についての指導法を話し合っている。振り返りでは、活動時に気づいた点や反省点、また、実際の活動を通して感じた教育目標との間隙についてなど、細かいところまで十分に話し合われる。このような情報共有や振り返りといった工程は、プラン検証システムにおけるPDCAサイクルのCHECKの機能に相当するものといえる。また、指導計画の問題点について議論が交わされ、その結果として、指導案及び教育方法の改善が提案される。こうして指導法を学年で統一することで、1つのプランを複数のクラスで検証することが可能となり、二重、三重のCHECKを行うことができるのである。

③教師同士の学び合いの場としての機能

学年会の「教科」場面では、学年主任などの熟練の教師が、自身の経験をもとに指導法のアドバイスをを行っている。アドバイスの内容は、授業に関する具体的な教授法や、統合学習等のスケジュールの組み方、問題行動をとる子どもへの対応についてなど、多岐に及ぶ。これらのことから、学年会は、教師同士の学び合いの場としても機能しているといえる。これらの活動の重要な点は教職研修の機能が学年会において強力に機能している点である。学校内における日常的授業実践のための打ち合わせ会（学年会）が授業運営のためだけでなく、教師の授業スキルの学びの場、教職研修の場として機能している点にある。秦の教職研修の場は、具体的な教育実践の場においてこそ実現されるべきであることを学年会は主張している。また、教師は「子ども」場面や「教科」場面などにおいて、自身が抱える、子どもの問題行動や授業での指導法などについての悩みも打ち明けている。また、教師が他の教師の仕事量やクラスの状態を気遣い、援助する場面もみられた。このような点から、教師たちは密なコミュニケーションをとり、それぞれの状況を把握するとともに、互いに支え合っていると考えられる。教師間の結束を固めることは、学年経営を重視する北条小学校において非常に重要だといえる。同僚同士の教え合い、学び合いの場が確実に保証されている。

(2) もう一つの研究である早稲田大学と明峰小学校の連携による持続的な学校改善への取り組みに関する研究は、イギリスにおいて注目された Capacity 概念に基づくものである。Capacity は、専門性(Expertise)、モチベーション(Motivation)、機会(Opportunity)の3つの関数として表わされる。これらの3つのいずれが欠けてもCapacityは機能しない。本取組はこれらの3つを高める活動をデザインし、学校現場での連携に組み込んだ。Expertiseを高める活動としては、授業実践に役立つ知識ベースの構築が試みられた。毎時間の指導案作成とその修正を教師に求めたが、学校現場で実現するには高いハードルであることが明らかとなった。Motivationを高める活動としては、学生ボランティアによる教育活動支援が行われ、学生を活用した新たな授業への取り組みへのチャレンジが促された。Opportunityを高める活動としては、浅田研究室の学生によるゼミ活動が教育現場で営まれることによって、研究知見の共有とディスカッションが現場の教師の活動に統合されることになった。

ボランティア活動を通して、学生が学校での教育実践やそれに関わる活動に能動的に取り組むようになるにつれ、教師や学校へのプラスの影響が見られるようになってきた。

具体的には、教師が学生を授業においてどのように活用できるかといったことを指導計画に組み込むことができた。あるいは、教師の仕事の一部を学生が担うことにより、教師に時間的にも精神的にも余裕を生み出すといったことが見られるようになった。また、学生からの提案で朝時間における学力向上の充実化を図るといったことも始まり、学生のボランティア活動が教育実践に影響を与えるようになったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①岸俊行・澤邊潤・大久保智生・野嶋栄一郎

(2010) 学生・教師を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討—授業雰囲気尺度の作成と授業雰囲気の第三者評定の試み—, 日本教育工学会論文誌, 34 (1), 45-54.

②澤邊潤・野嶋栄一郎 (2010) 教師の活動記録に対する管理職教員の評価に関する一

検討—活動記録に対する校長・教頭の評価コメントの内容分析から—, 日本教育工学会論文誌, 34(suppl.), 173-176.

③大久保智生・澤邊潤・岸俊行・有馬道久・

野嶋栄一郎 (2010) 教職志望学生を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討—教職志望学生はどのように授業の雰囲気を認知しているのか—, 香川大学教育実践総合研究, 第21号, 117-124.

[学会発表] (計8件)

①澤邊潤・野嶋栄一郎 (2009) 学校管理職の

評価コメントが教師の教育活動に与える影響. 日本教育工学会, 491-492.

②澤邊潤・亀石由貴・野嶋栄一郎(2009) 算数

授業場面における教師の指名傾向とその特徴. 日本教育心理学会, 563.

③澤邊潤・野嶋栄一郎(2010) 児童への教育活

動と教師の成長機能を併せ持つ循環型学校システムの提案—千葉県館山市立北条小学校をモデルとして—, 日本教育工学会

第 26 回全国大会講演論文集, 605-606.

- ④道津未来・亀石由貴・澤邊潤・野嶋栄一郎
(2010) 教室授業場面における「話し合い」の構造分析—「強化授業内の話し合い」と「教科授業外の話し合い」2 つの話し合いに焦点化して—, 日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集, pp699-700.
- ⑤今村こころ・浅田匡 (2010) 小学校における部分的メンタリングに関する事例分析, 日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集, pp379-380.
- ⑥Kokoro Imamura, Tadashi Asada (2011) A Research on Mentor's competencies from the viewpoint of Mentoring relationship in Japan induction program, British Educational Research Association Main Conference, Mentoring and Coaching SIG Individual papers, pp34.
- ⑦今村こころ, 浅田匡 (2011) 学校現場を支援する学生ボランティアの実践力を伸ばすアクション・リサーチ, 日本教育工学会第 27 回全国大会講演論文集, pp535-536
- ⑧澤邊潤・野嶋栄一郎 (2011) 個人の経験と学校資源を取り込んだ若手教師の成長過程に関する事例研究—教師の活動記録としての「週案」に焦点化して—, 日本教育心理学会第 53 回総会, pp297.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野嶋 栄一郎 (NOJIMA EIICHIRO)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号: 20000086

(2) 研究分担者

浅田 匡 (ASADA TADASHI)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号: 00184143

(3) 連携研究者

生田 孝至 (IKUTA TAKASHI)
新潟大学
研究者番号: 20018823

(3) 連携研究者

澤邊 潤 (SAWABE JUN)
新潟大学・教育・学生支援機構・特任助教
研究者番号: 30613583